

For “Kanoya City”  
to become  
an identity

# 「鹿屋市」が

# アイデンティティになるために



前田 健さん (東京都町田市)

Data

寿出身の23歳で、大学進学を機に上京。「教師としての幅を広げたい」という思いで民間企業で就職を決めた。現在は町田市の飲食店で、接客や店舗全体のマネジメントを担当するアシスタントマネージャーを務めている。



## 地元をどう思うか 若年層に聞く

若い人は、地元や鹿屋市のことをどう思っているのでしょうか。東原町で酪農を営む戸塚さんに話を聞きました。

「私は実家の酪農を手伝っているのですが、野菜をもらったりとか、人のあたたかさに触れられたりするところが鹿屋のいいところだと思えます。ただ、どうしても買い物とか遊ぶ場所が足りないとは感じています。高校では熊本県、大学時代は北海道で過ごした戸塚さん。県外での経験を踏まえた、鹿屋で働く中で感じた率直な意見です。

「地元が好き」というより、酪農そのものが好きで続けていければいいと思って、地元で働いているのが



株式会社戸塚楽農 (東原町)  
戸塚 蒼依さん

Data

東原町出身の24歳。大学生の時、サークル活動として地域の共進会に牛を出品していた。令和6年の鹿児島県ホルスタイン共進会で優秀な成績(第2部1席)を残す。動物が大好きで、子どもの頃から牧場を走り回り、牛が遊び相手だったと語る。

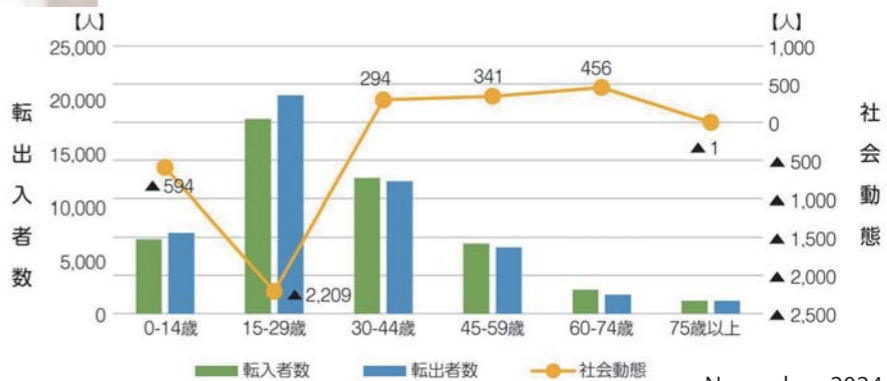


## 若年層の転出超過 鹿屋市の現状と課題

本市では、国より10年早く人口減少が始まっており、2000年の10万6,462人と比較すると2015年までの15年間で約3千人が減少し、2060年には7万人程度まで減少することが予想されています。

特に、年齢別の人口移動の状況を見ると、10歳代で進学や就職に伴う大幅な転出超過となり、20歳代では就職等による転入超過が見られますが、10歳代の転出数の半数程度となっています。つまり、転出した若年層の約半数が地元に戻らないということになります。これは本市だけではなく、どの市町村も直面している全国的な課題となっています。

直近10年間(平成25年～令和4年)の年代別社会動態(累計)



※「鹿屋市人口減少対策ビジョン」より引用

## 若年層が感じる 同世代の状況

「私は今、東京都で働いています。将来的には鹿屋に戻って教師として働きたいと思っています。」  
東京都在住の前田さんは、鹿屋市への思いを語ります。

「大学へ入学したときはコロナ禍で、全てオンライン授業。キャンパスは関東でしたが、鹿屋市でアルバイトをしながら過ごした時期がありました。その中で、一番は家族ですが、地元の人たちのあたたかさや食の豊かさに触れた経験が大きかったです。町田に住んでいるとなおさらそう思います。ただ、私のように鹿屋に戻りたいという意思を持っている同世代は、多く

正直な気持ちです。同世代の友達や仲間がもつとすれば、鹿屋が好きになって、残ろうって思うかもしれません。今は地域の子どもたちに畜産を知ってもらい、乳牛と触れ合えるような体験を提供することを目標に仕事をしようと思っています。」

## 2人から 見えてきたもの

働く場所も立場も違う2人の取材から見えてきたのは、本市が抱える様々な課題や若年層の実情。引き続き、市民調査やまちづくりに携わる人たちのインタビューから「地元の魅力」が何か、探っていきます。

next  
みんなが思う  
「鹿屋市」